共生型(訪問)サービスをはじめるにあたって

社会福祉法人せたがや樫の木会 ヘルパーステーション樫の木

甲斐 実

(新規事業 ヘルパー派遣 共生型サービス)

1. はじめに

ヘルパーステーション樫の木は、障害者総合支援法の居宅介護・重度訪問介護(ホームヘルプ)と世田谷区の移動支援事業(ガイドヘルプ)を行う事業所である。令和2年度の実績として、ホームヘルプでは主に知的障害をお持ちの16名の契約者(利用者)に対して、年間で1778.6時間、ひと月に平均するとだいたい148時間ほどのサービス提供を実施した。現在、ホームヘルプサービスを利用されている方は、平均年齢38.8歳(24歳~59歳)となっているが、18歳以下の



学齢期の方への居宅介護支援は行っていない。提供するサービスの内容は、主に身体介護と家事援助の2種類あり、それぞれ入浴介助、食事介助や掃除、洗濯など多岐にわたる。また、各々の利用者の利用される時間は、夕方から夕食前後の時間帯が多い。日中は通所施設を利用し帰宅後の過ごしのヘルプという形での支援を展開している。

2. 目的

令和3年5月に、世田谷区代田から現在の松原へ移転したのを機に訪問介護事業の指定を取得するプロジェクトを立ち上げた。平成14年の法人設立から世田谷区内の障害がある方、特に知的障害者への支援を展開している当法人だが、施設通所をされている利用者とその家族の高齢化に対応し、住み慣れた地域での生活が継続できるようバックアップ体制の整備を進めていくことを目指すものである。そこで、実際に事業を開始するにあたって、制度等を学びながら現状の課題を調べるとともに、どういったサービスが提供できるかについて整理をし、まとめていく。

3. 制度の概要

2018年の改正で、新たに導入された「共生型サービス」は既存の障害を対象とした居宅介護事業所、あるいは介護保険の訪問介護を行っている事業所が他方の指定を申請しやすくなる制度である。それまでは、いわゆる「65歳の壁」といわれ福祉サービスを利用していた障害者が65歳を超えてサービスを受ける場合、介護保険を優先させるというルールがあり、使い慣れた障害福祉サービスが受けられなくなる問題があった。その課題を解消すべく創設されたのが共生型サービスである。

実際のところでは、それまで縦割りされていたものが合わさることもあり、一つの事業所が双方のサービスを提供するということで、細かく見ていけば障害者と高齢者の配慮点などに相違する部分が多々あるかもしれない。しかし、サービスを利用し生活を営んでいく上での負担を減らしていくという点においては、重なり合う部分は大きいと思われる。

4. 経過と結果

制度を学んでいく中で共生型サービスでは、年齢を重ねても同一の事業所でサービスを継続していけること、慣れ親しんだ職員や顔なじみのヘルパーと住み慣れた地域で安心して生活を続けることができるということを学ぶことができた。また、サービスの対象者が広がることにより、例えば一事業所が一家庭の障害をもった子とその親への支援を展開できるなど、幅の広いサービス提供ができるというメリットに気づくことができた。

5. 今後の課題とまとめ

実際の開設にむけて利用される方を想定して調べをすすめていくと、現状の生活に大きな支障はないが、親子とも年齢を重ねて何かサービスが利用できると少し楽になりそうだというケースから、親子とも生活上の困り感はあるのだが、どこからどう介入するのがいいかと悩んでしまうケースまで様々な事例が散見された。

であるならば、なおさら高齢、障害どちらかのサービスを足掛かりにして居宅での手助けが入ることで、生活にゆとりがもたらされる糸口になり得るのではないかとも推察される。これから居宅介護支援事業所、あんしんすこやかセンターその他、関係する機関と連携を図りながら、支援を必要としている利用者・ご家庭にサービスを届ける手筈を整えていくことになる。

直接、利用者を支援することもさることながら、支える人を支えていくことで利用者が生活しやすくなる仕組みや取り組みを工夫していくという視点を得た。横断的な役割を担っていくことになるだろう。今後はヘルパーの増員や介護支援技術の向上など、より具体的な中身についての検討が必要になってくると思われる。一つひとつ、チームで協力し合いながら指定の獲得を目指していく。

<助言者コメント>

徳永 宣行(世田谷区介護サービスネットワーク代表)

障害者支援の現場において「65歳の壁」という言葉はよく聞きます。

これまで障害福祉サービスから介護保険サービスへの移行時に、支援者が総入れ替えになるようなことはありました。

相談支援員からケアマネジャーに代わり、通所施設も就労支援施設からデイサービスに、また今回 の取り組み事例のヘルパー事業所も同様でした。

利用者本人にとっては、慣れ親しんだ支援者が離れてしまう不安や混乱が大きいと思います。 共生型サービスはそのような問題を解決できる一つの方法だと思いました。

まさしく切れ目のない支援をチームケアで実現できるようになれば、とてもいいと思いました。